北海道大学　大学院農学院　修士論文発表会，2016 年 2 月 4 日

自然公園における生物多様性とレクリエーション利用体験を考慮したゾーニング手法の検討～大雪山国立公園を事例として～

環境資源専攻　森林・緑地管理学講座　花卉・緑地計画学　兪晨

1. 背景と目的

日本の国立公園は，1930 年代の山岳の大風景地や名勝地の指定から 1980 年代後半の広大な湿原景観の指定まで，時代ごとのニーズに応じ，指定の要素が変化してきた。最近では，自然公園法の改正，生物多様性国家戦略の策定により，「生物多様性」「自然共生」などの重要性が高まってきている。この間にも国立公園の公園区域と公園計画は変更を重ねられてきた。本研究では，公園計画の変更や諸外国の事例にみられるゾーニングの要素を明らかにし，今後の国立公園をゾーニングするために必要な要素を検討した。また，大雪山国立公園を対象に，自然資源の保護と利用体験の提供を考慮したゾーニング手法の検討を行った。

2. 方法

環境省のホームページで公開されている 2003 年 6 月から 2013 年 2 月までの国立・国定公園区域及び公園計画の見直しの再検討，点検，一部変更から変更の理由を整理した。最近重視されてきた自然保護や利用に関する要素を抽出し，「国立公園の公園計画作成要領」等の自然公園の公園計画に関する関係法令に記載された要素との比較を行った。さらに，海外の自然公園の管理計画と自然保護地のゾーニングに関する既往研究において，ゾーニングの要素として使われたものを抽出した。これらの要素を用いて，大雪山国立公園の地域特性も考慮し，大雪山国立公園の自然保護と望ましい利用体験の提供を目指したゾーニング要素を選択し，国有林の小班を単位に，個別の評価指標ごとの地図を作成した。各指標の値を 0 から 1 の区間に換算し，総合的な評価点数を算出することにより，小班をグループ分けしてゾーニングした。

3. 結果

自然資源保護のゾーニングの要素として「動植物種」「自然現象」「自然性」の 3 つの項目が選ばれた。利用体験のゾーニングの要素として「アクセス性」「施設」「利用活動」「人為的なインパクト」の 4 つの項目が選ばれた。これらの要素を用いて大雪山国立公園におけるゾーニングを行った結果，自然資源保護は，その重要性が高いものから低いものまで小林班を単位に 5 つのゾーンに分けられた。また，利用体験は，観賞・観光に適する地域から原始的な体験の得られる地域まで 4 つのゾーンに分けられた。現在の地種区分と比較したところ，一部に自然資源保護の重要性や利用体験のゾーンとの不一致がみられた。

4. 考察

特別保護地区は，自然資源保護において妥当と考えられた。第 1 種特別地域は，重要性の低いゾーンがあり，生物多様性などの観点が不足している可能性が考えられた。利用体験においても，バリエーションルートを考慮する必要性などが指摘できた。